

★ 星 の 文 藝 欄 ★

冬 夜 郎 興

野 尻 抱 影

み つ ぼ し

エスキモ¹の海豹取りが また、御先祖さまが、 刻ましやつた雪の段々。 マリヤさまの杖、ヤコブの杖。 日本の名の「竹の節」²。 ストックをオリオンへ向けてみ給へ。	クレヴァスで死んだ人魂。 天へ昇つて来いよと、 耶蘇信者には勿體なや、 けれど、スキーヤーの君には たそがれのスロープを下りながら
---	--

カ シ オ ペ ヤ

あれは空の黄金^{きん}の橋 ひつそり西へすべつて行く 雪に音色が凍つたのだらう。 代つてそろそろせり上がる もう春の支度とは氣が早い。	夜々^{よるよる}天の川の雪道を 角笛の星[*]も鳴らぬのは でも、あれが遠ざかると、 アドバルーン、北斗七星。
---	--

* 小熊座の α , β , γ (ダンテ)。

す ば る

羽子板星[*]が昇ります。 里の羽根の音を聞きません？ ライスカレーでせうよ、今晚も。 だいふ伸びましたこと、おひげが。	ヒュツテの窓でのぞいて イギリスの名では匙^{さじ}の星。 インドでいふ剃刀ぼしなら、
--	--

* 京都、美濃、安房でいふすばる星。

ペルセウス

天の川の銀盤で さても美事なフィギュア、スケールディング。
靴先にいつの間に拾ひ上げた 眞珠の頸飾、プレヤデス星團、
落し主はシニヨリナ・アンドロメダ。

猫の眼*

^{いひで}飯豊の雪の穴で、O は、 空の山猫ににらまれて、
夜つびておびえてゐた、とさ。

* 静岡地方でいふ雙子座の α, β 。

エリダヌス

蒼ざめた夜にひとり、 オリオンのほとりから
大きなスラロームを描きながら 南の地平へ消えて行つたのは誰れ。
とびとびに星の列を シュプールの果ての果てまで行き、
ヤッホーを嘯鳴つてみたまへ。 と、地球のあつちで、
^{かなめ}隻眼で笑つてみせるのが、 エリダヌスのアケルナル。

それぞれの星あらはるゝ寒さかな 太 祇

單純な句ですが、自分の天文趣味から大好きな句です。又冬の星の句としては第一位のものだと思つてゐます。他の季節には見られぬ燦爛たる星宿が霜夜の空に次ぎ次ぎと昇つて來る現象が、如何にも鮮かに、そして寒々と出てゐます。『それぞれの』から考へて、太祇は例へば、すばる星、つりがね星（ヒヤデス星團）、からすき星（オリオン）などを知つて居て、それらを眺めながら自然に口ずさんだのだと思はれます。

（むらさき新年特大號 野尻抱影）